

士官との世話ばなしの中で、ソ連では一般の人たちが五、六人以上集まった席で自由な話はできない、だれがゲーバウー（特別警察）であるか不明ゆえなり、労働時間にはただ与えられたノルマを消化するだけで、自由が束縛されているとこぼしていた。

二十一年の夏ごろよりよく生活面も落ち着いてきた。熱滅菌でシラミもなくなり、軍医さんも薬剤の面で大分楽になった。冬期間に同じ職場の衛生兵が風土病の熱病にかかり亡くなられたことが思い出される。誠に残念なことでした。自分がなければのビタカンフルの注射をしながら脈をとり、最期を看取ったことが悪夢のように思い出される。当時は敗戦のどさくさで、最悪の状況の中の作業で、日常の業務に追われる毎日であった。苦しい生活にもようやくなれ、作業日程も安定してきた。病室内の患者も平均して病状が平靜になってきた。保育大隊も体力が付いて、缶詰工場へのラポーターに通勤できる者が多くなってきた。一時は衛生兵も駆り出されてラポーターに出たこともあった。

二十二年七月、保育患者とともにダモイの帰還命令が出て、いよいよ夢にも見た故国へと出発することになった。幾たびか死線を越えての帰還で、ナホトカ港より迎えの永祿丸に乗船した。日本海を渡り舞鶴港に入ったときの海の青さ、八月六日、平引揚げ桟橋に上陸したときの感激は一生忘れることができない。余りにも多い綱渡りの不思議な生還であった。一歩間違えば銃弾で倒れており、また熱病で倒れてこの世になく、またフィリピンのセレベス島で船とともに戦死していたわけである。不思議な生還であった。

## 追憶の瓊瑋・ブラゴエ

福井県 林 俊男

① 敗戦も色濃い昭和十九年十月二十日、中部第三六部隊に現役入隊し、十月二十五日早朝、防寒被服を支給され部隊を出発である。雑のう、水筒（竹筒）、地下足袋という情けない姿で京都の東本願寺に集結。京都、

津師団の兵隊と合流、軍用列車にて出発。

山陽本線を一路南下。兵隊受領の下士官の話によれば、博多にて乗船の予定とのことであったが、都合により下関下車、市内旅館に宿泊。翌日関釜連絡船に乗船、港を離れるまで救命胴衣を着け、船室にすし詰め状態であつた。

無事釜山到着、軍用列車にて一路満州へ。ハルピンを過ぎるころより車窓に氷が付き、寒さが増してきた。

② 十一月一日、黒河省瓊瑯着。直ちに満州第六一二部隊第六中隊（歩兵砲）に配属、ノモンハン参戦の旧式九四式三七ミリ速射砲の訓練を受け、二十年二月十一日無事一期の検閲を終わり、一応陸軍二等兵の体裁を整える。極寒零下三〇度Cの訓練は大変厳しく、多くの戦友が赤痢に倒れ、帰らぬ人となった。

迎春、花の咲くころ、二站到第二線陣地構築のため天幕生活に入り、連日陣地掘り作業を続ける。間もなく独立混成第一三五旅団編成、私は独立歩兵第七九五大隊（不朽三七五六三）に編入、歩兵砲小隊（小隊長仲田見習士官）に所属。二站の第一大隊陣地構築に従

事中、昭和二十年八月九日、突然ソ連軍は一方的に不可侵条約を破棄、国境線を突破する。

第一大隊は早急に瓊瑯陣地配備の命令あり、我々は南丘陣地に入り、歩兵第二中隊と共に配備につき、被服等の支給、本部へ急造爆雷の受領、各人の蛸壺掘りなどを行い、初めて窮坑内に入る。

③ 連日敵機による機銃掃射、我が方は対空火器がないため、超低空の攻撃に応戦はするなどの命令があり、蛸壺で身を守るのみ。

そのうち、瓊瑯駅方面よりの砲撃、黒龍江よりの艦砲射撃は熾烈を極めた。我々の陣地は中央に近い高地にあるため展望がよく、敵の動きが見え、艦砲射撃の火を吹く瞬間が手に取るように見える。直接敵対しない砲弾にむざむざ命を落とすわけにはいかない。ヒュルヒュルと音がすると蛸壺に身を隠す。

我が小隊の装備は三七ミリ速射砲二門のみ、そのうち一門に七曲方面の敵戦車の攻撃命令があり、植村軍曹以下出陣、帰ってきた話によれば、敵戦車には歯が立たず、弾丸が跳ね返り、敵戦車の攻撃により擱坐さ

れたとのことである。

夜空に曳光弾が光り、陣地を真昼のように照らし出す。北満の大きなやぶ蚊の襲撃、銃弾の炸裂音、一寸先も見えぬ漆黒の闇。そのころ、陡溝子陣地の全滅、表門方面の激戦、また、敵兵が野戦病院方面に出没などの情報が入り、陣地は完全に包囲されており、死に場所はいよいよここかと覚悟を決めた。不思議に死の恐怖はなかったと今も記憶している。

④ 昭和二十年八月二十一日、我々の守備をする南丘陣地の下の凹地には砲兵陣地があり、連日猛爆を受けていたが、朝から一発の銃声も聞こえず静かな夜明けである。そのうち停戦が決まり、部隊は陡溝子方面で武装解除との命令あり、後々使用できぬように速射砲のさせん部を草むらに投げ捨て、持てる限りの食糧、甘味品などを持って集合。先のことは分からぬままだが、これで戦争は終わり、なぜかホッとした。

命令一下、混乱もなく陡溝子に向け出発。途中一般婦女子がソ連兵に引き立てられ、陣内に向かってゐる。軍隊の庇護もなく、いっぱいの荷物を背負う姿は心細

く、我々も捕虜の身、何とも残念でならない。陡溝子に集結、各々武器を山積みにする。ソ連兵が我々の身体検査を行うが、キャラメルを見て不思議そうにする。食べてみせると初めて納得、以後キャラメルを寄せとせがむ。初めて見る食い物らしい。

武装解除後、いよいよ集結地孫呉に向かう。途中の満人の家々や行き交うマーチヨには赤い布切れがはためいており、さすがは国境の住民は対応が早いので驚いた。行軍中、隊列を離れた者や遅れた者には、容赦なくソ連兵は発砲する。命がけの行軍である。

⑤ 孫呉では元官舎に入り、毎日糧秣整理の作業に駆り出され、間もなく作業第一大隊を編成、満州の鉄道は破壊されて通れないので、シベリア鉄道経由でウラジオストクから東京ダモイだとたまされ、歩かされた。

黒河に到着、いよいよ赤い国ソ連に入るのだ。江岸に近い官舎跡に入り、軍隊時代の記録、貯金通帳等を焼却。フェリーに乗船、ブラゴエシチェンスク上陸、集結地に向かう。見物の市民がヤポンスキー、ハラキ

りなど罵声を浴びせ、唾を吐きつける。女子が裸足でいるのが印象的であった。郊外に天幕を張り野営。先に來ている者、続々到着する者、シベリア抑留の始まりである。

次々と貨車に乗り込み出発するが、我々の隊には命令がこない。皆環境で戦い、勇猛であったので、帰してくれないのではないかと臆測が飛ぶ。そのうち出発命令。徒歩で市内を行進、江岸に近い廢屋に着く。窓も入っておらず床もない。早速公園に行き、落ち葉を集めて床に敷き、寝に着く。翌朝、食器洗いするとき、手が食器にくっつく、かなり寒い。時に十月一日、これからの極寒を思い知らされる。

⑥ 入ソ以来、日増しに寒さが増してくる。着衣は満州時代のままである。五百人ほど収容されているアムール州第十一収容所では、入ソ以来一度の入浴もなく、体は垢にまみれ、虱はわき放題だ。毎日カンテラの灯で三十匹ほどつぶす。また翌日同じ数の虱がわいている。そのうち発疹チフスが蔓延。四〇度の高熱が続き、舎内にて死亡する者が出て、棺桶に入れて積み上

げ、棺桶が足りなくなると一個に二人を収容し、板が不足したので厠の囲いの板でつくり、死体が溜まると馬車に積み墓地に運ぶ。墓地の穴は、毎日使役で穴掘りに出掛ける。明日は我が身の墓穴を自ら掘った。

⑦ 我が小隊の仕事先は主に精穀工場と火力発電所で、精穀工場では大豆、小麦、燕麦などの貨車、船の積み下ろし及び袋詰めが主な仕事である。発電所では、トロツコでの石炭運搬、ボイラー焚きである。発電所では、帰りにバーニャ（蒸し風呂）に入れるので有り難かった。その他、機械工場、パン工場、ビール工場、製粉工場、ウオッカ工場などの石炭運搬、雑役である。各仕事先では完成度によりノルマのパーセントが渡されたが、それによる食事の差別はなかったように思われる。

ノルマは職場の責任者の感情によって、楽な仕事に一二〇%から一五〇%もあれば、ヘトヘトになるまで働かされて七〇〜八〇%と様々である。

通常は八時間労働で週一日の休日があるが、夕食後召集がかかり、石炭下ろしの夜間作業である。特に厳

寒時の貨車下ろしは悲惨である。空腹の上、疲労困憊している。まして深夜の寒さは格別である。何ぶんにも貨車が不足しているので、到着すれば即石炭を下ろし、返さなければならない。ダワイ、ダワイの連続である。

また、船が入れば発電所の夜勤明けでも、荷下ろしの召集がかかる、問答無用である。即荷下ろしをしなければならぬ。マイヨール（少佐）の命令だという。カンボーイに、労働者の国で強制不当労働をなじり、マイヨールの非人間的な命令を非難すると、収容所長のコーチンは怒り出し鞭を振り上げた。今はこれまでも覚悟を決めたが、さすがにそれ以上のこととはなくホッとした。

⑧ 入ソ時は病弱者、健康者の区別なく作業に駆り出された。強者は弱者を庇い、頭数を揃えねばならない。最初の冬に死者続出。それに驚いた上層部は、入浴を週一回始めた。洗面器一杯の水で体を洗い、鉢槽にかかる入浴は有り難かった。衣服の虱の駆除を行った。そのころ、ソ連軍医少佐（愛称オキンチャン）の健康

診断があり、熱のある者は入室、重症者は病院送りとなる。

作業場への出発ごとに人員点呼を行うが、彼らは乗算ができないので、五列縦隊に並べ、数える。帰ったときも同じく人員点呼を行う。往復はダワイダワイの連続で、体の悪い者が隊列より遅れると容赦なく床尾板で小突く。週一回収容所の人員点呼がある。たいがい日曜日の朝食後行われるが、何ぶん数字に弱いソ連兵のことである、人員を数えるのに昼ごろまではかかる。零下数十度の中、戸外での人員点呼の苦痛は想像を絶する苦難である。

着衣は入ソ時の着の身着のままであるが、冬は防寒外套、防寒靴の支給があつたが、何れも旧関東軍のものであつた。

主に満州より運んできた雑穀、高粱、粟、燕麦、豌豆をスープ状にした粥が缶詰の空き缶に朝夕一杯、昼は黒パン三百グラム一個、朝夕食は一週間くらいは同じ雑穀が続き、豌豆の場合は、粥状にならないので、一杯当たり十二粒くらい数えられる豆汁であつた。二

十二年に入り粉が割り当てられ、水筒に入れ棒で突つき脱穀をし、炊事に納め、粥に炊き上げ、入ソ以来初めて米を口にした。粉殻が多く、一口ごとに吐き出すのに苦労した。魚は鯀の塩漬、鶏の頭と足が樽詰で入り、いずれも二年目よりスープとして出された。

収容所は入所後改造され、三段に仕切られ、座つて頭がつかえるくらいの高さで、病弱者は下段に、健康者は二、三段に、足と頭を交互に毛布各人一枚を広げて重ね、寒さを凌いだ。採暖は壁際にベーチカがあり、燃料は廃材を集めて燃やしたが常に寒く、採光は小さな窓が少々。二年目以降、死亡者が多く出たため、環境にはうるさくなり、巡察の前には必ず舎内の石灰塗りをさせられた。

洗脳教育は、田中、西村氏らを長に、主に日本新聞による教育を行うが、田中氏は、何があっても生きて日本に帰らなければならない、表面上でもよいから協力してくれと言う。我々下級兵士はどちらでもよく、聞くところによれば、アムール州の収容所で成績（民主化度）が一番とのこと、ダモイも一番早かった。

⑨ 抑留中は、他を顧みる余裕はない。神仏もなく、ただ自分がいかに生き延びるか、明日は我が身。ノルマ達成は集団の責任、弱い人の分は進んで働いた。何が何でも日本に帰らねばならない。

二度赤十字の通信が許されたが、もし死んだら家族を悲しませるだけになるので、ハガキは出さなかった。帰還して分かったが、郷土で、シベリアからの来信がないので心配をしていたようである。

⑩ 第十一収容所で帰還を知らされ名前を呼ばれたが、将校は除外され、二段貨車に乗り込んだ。一日じゅう走るかと思えば、半日くらいは停止するという不定期走行でナホトカに着き、暮舎生活を始め、乗船待ち。そのころのナホトカ港は建設途上で、毎日山から港へ石運び、作業が終わると民主化グループによる赤化教育があり、インターナショナル、赤旗の歌を覚えさせられ、またスターリンに忠誠を誓う署名をさせられた。それに従わない作業大隊は逆送され、重労働につかせられると脅かされ、逆送された大隊もあったようである。

いよいよ乗船の日が来た。港に日の丸の旗がはためく。明優丸のタラップに足をかけた瞬間、これで帰れるんだと感無量であった。

船が港を離れ、周りから馬鹿野郎、馬鹿野郎と罵声が飛んだ。日本海は大荒れで、甲板の仮設便所が波にさらわれていた。舞鶴に近づいて、あの荒涼たるシベリアと比べ何と美しいことか、箱庭を見るようであったのを今でも思い出す。昭和二十二年四月二十二日、無事上陸。

⑪ 生活しなければならぬので、あらゆる商売を転々とし、三年目に本業の機業を始め、紆余曲折はあったが、ソ連生活を偲び、励みにもしてきた。

## 思　　い　　出

長野県　宮　下　章　人

陸軍航空廠の軍属として、昭和十三年よりハイラルで陸軍の外郭組織としての航空廠に勤務していた。昭

和十八年現役兵として孫呉の第六四二野戦防空大隊に入隊。ここで基礎教育終了後、下士官志願兵として大連教育隊に入隊、約半年間の教育を受ける。終了後、原隊復帰。本隊はサイパンに転戦し、残留部隊とともに鞍山防空大隊に転属し、防空の任務につく。昭和二十年八月九日ソ連参戦と同時に、首都防衛のため新京に転戦し、首都防空作戦の任務につく。間もなく終戦となり、公主嶺で武装解除を受ける。

やがてソ連軍の命により黒河に集結、黒龍江河畔で野宿をしながら船を待つ。そのうち、ソ連船が中国船か不明だが古びた船が来て乗船し、プラグエシチェンスクに上陸、ここから貨車に乗り、途中下車して、馬鈴薯掘りなどの作業をし、二、三日後、セミチャソフ（山林鉄道七十キロ地点と呼ばれていた）の収容所に約二百名とともに収容される。

収容所での労働は、伐採と材木の貨車積みの重労働。食糧といえば燕麦、高粱が少量。空腹と寒さで作業ははかどらない上に、ノルマが課せられる。ノルマにより食事の量も決まる。イタチごっこの繰り返しである。